松飾德若譚

假名垣魯文作
錦朝樓芳虎画

辛未春
書盤堂壽梓

松の栄
徳若譚
初編上

徳和賀物語

初編上巻

假名垣作

芳虎画

加々吉版

徳若に御萬歳と御代も栄て在ますと松竹建る門邉に調へバホウとかけたる鶯の初音に通ふ

二丁めの次へつゞく

仁木黨助光政雪中兎を狩る元旦乃吉例

仁木黨助の娘阿雪
今妻阿妙
新田右京亮
源有近

○五郎左エ門一女阿梅
遊行上人徒弟
誠阿弥実ハ有近
嫡男
四郎三郎
近藤
○赤井の郷の荘官五郎左エ門
○三州常盤の郷士
常盤太良左エ門延繁

序文のつゞき

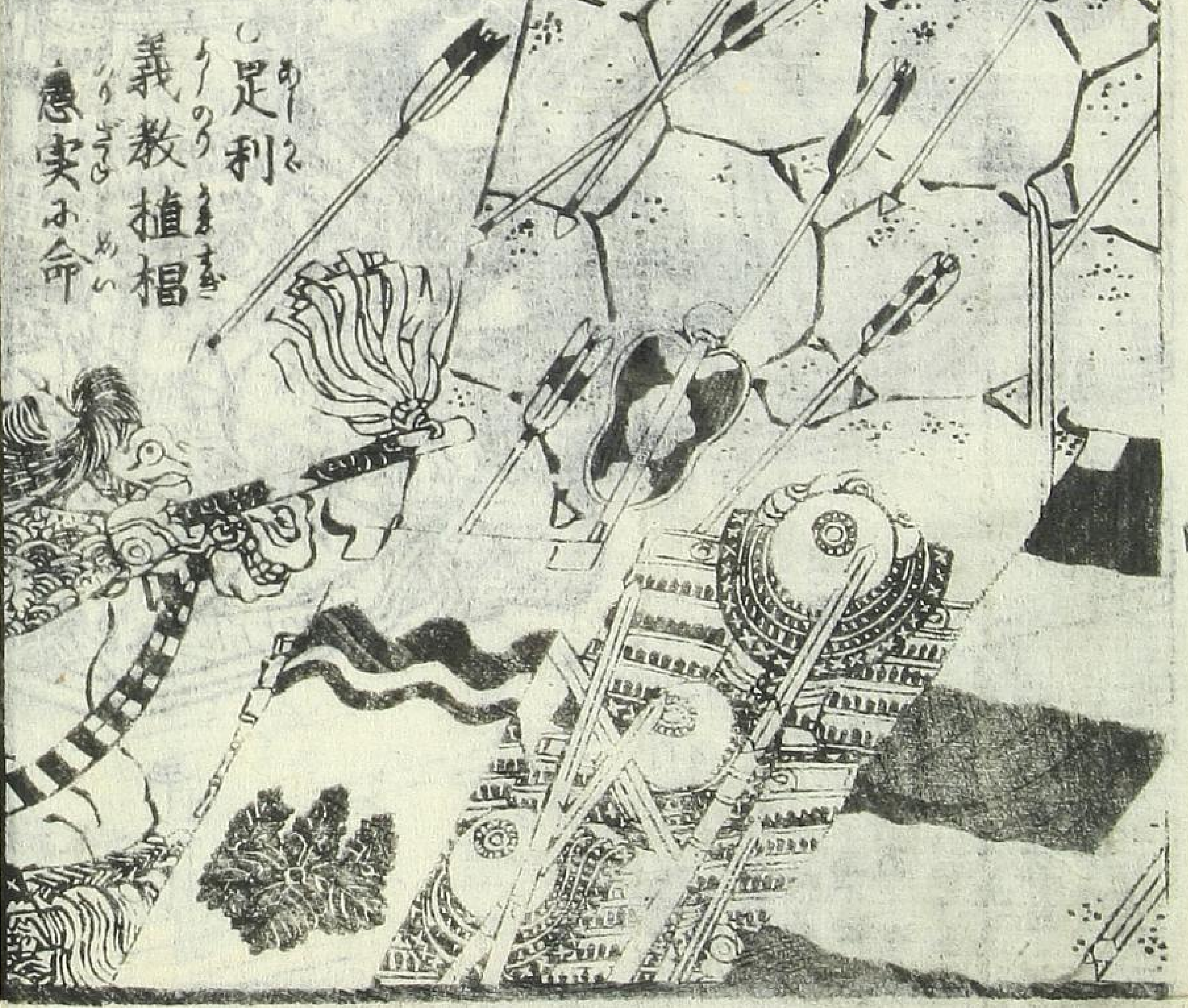
鼓の音に。實に聖代と改新る春の旦乃二日に試筆。好文木の窓前に。彼八橋の蜘手にかゝらむ脚色を設まくかきはじめて。先當編と三河記や。僅は種も在原に。東下向の名勝古跡。居ながら知るべき学問のたよりともならバ風土にかゝはる地理行極り。草稿遅てに書肆が催促。才若あらで看官が。まちかねるこれやと下稚が秀句。ヨット兼知の舌皷。ポンく誇て使を帰し。茲に初編の拄建素袍の袖乃長物語。弥勒十年辰歳まで。相続きての御評判を。正月祝言で冀ふになん

明治四稔

辛未初春

舊文こうらの[illegible]毎日在宿他行なし

氷湖堂 假名垣魯文



つゞき
四十よねんのつき日をへてあしかゞよしみつのこうゐんより南北両朝一元になりて天下せいひつにぞおよびけるそのゝち京都にうつりましゝ天下のおそれとなりて……

○足利義教 植楫 悪実に命

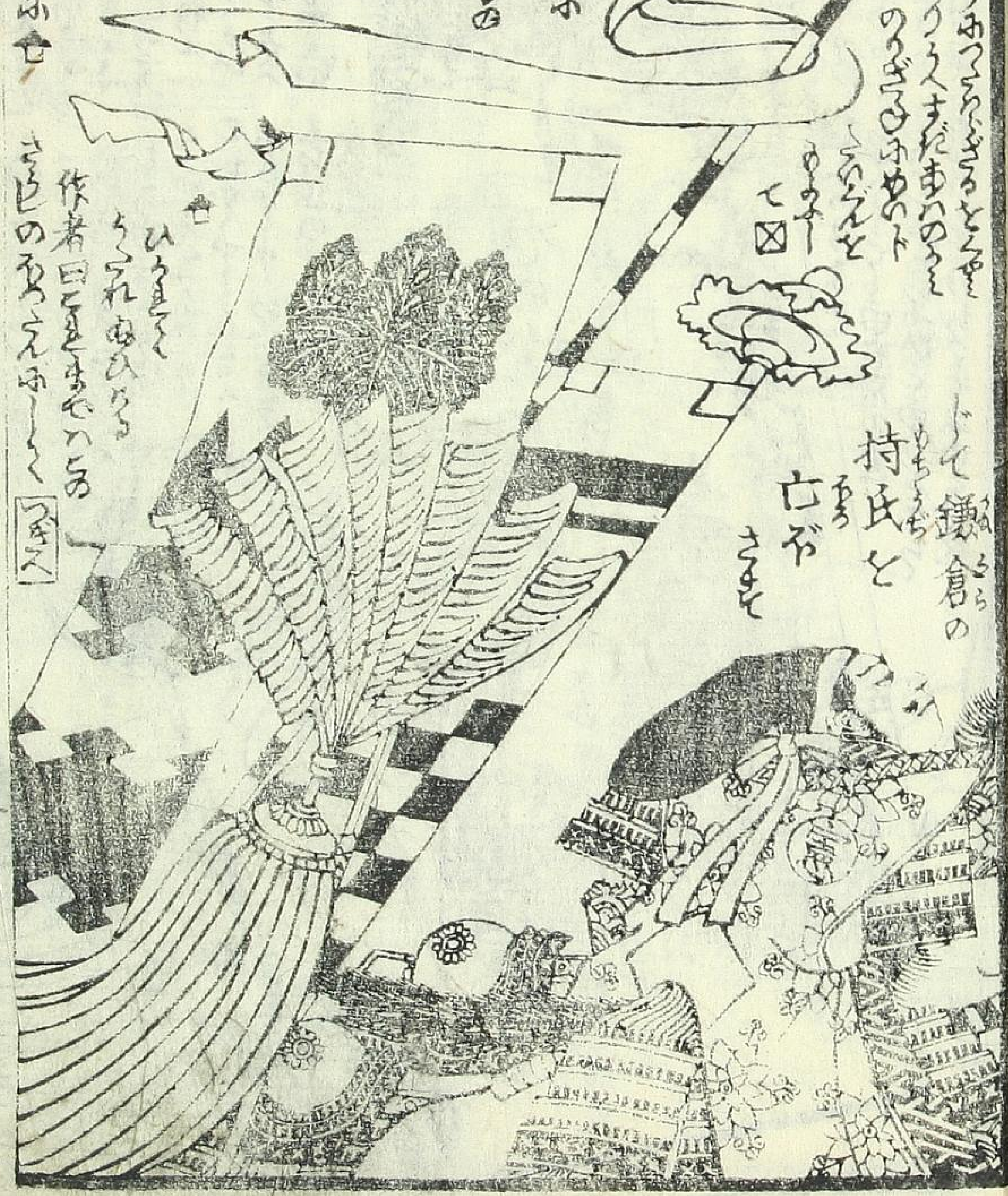


図 ……永享十一ねんきさらぎ……十三才……安王丸 春王丸……のりざね……

じて鎌倉の持氏を亡ぼさせて

作者曰……

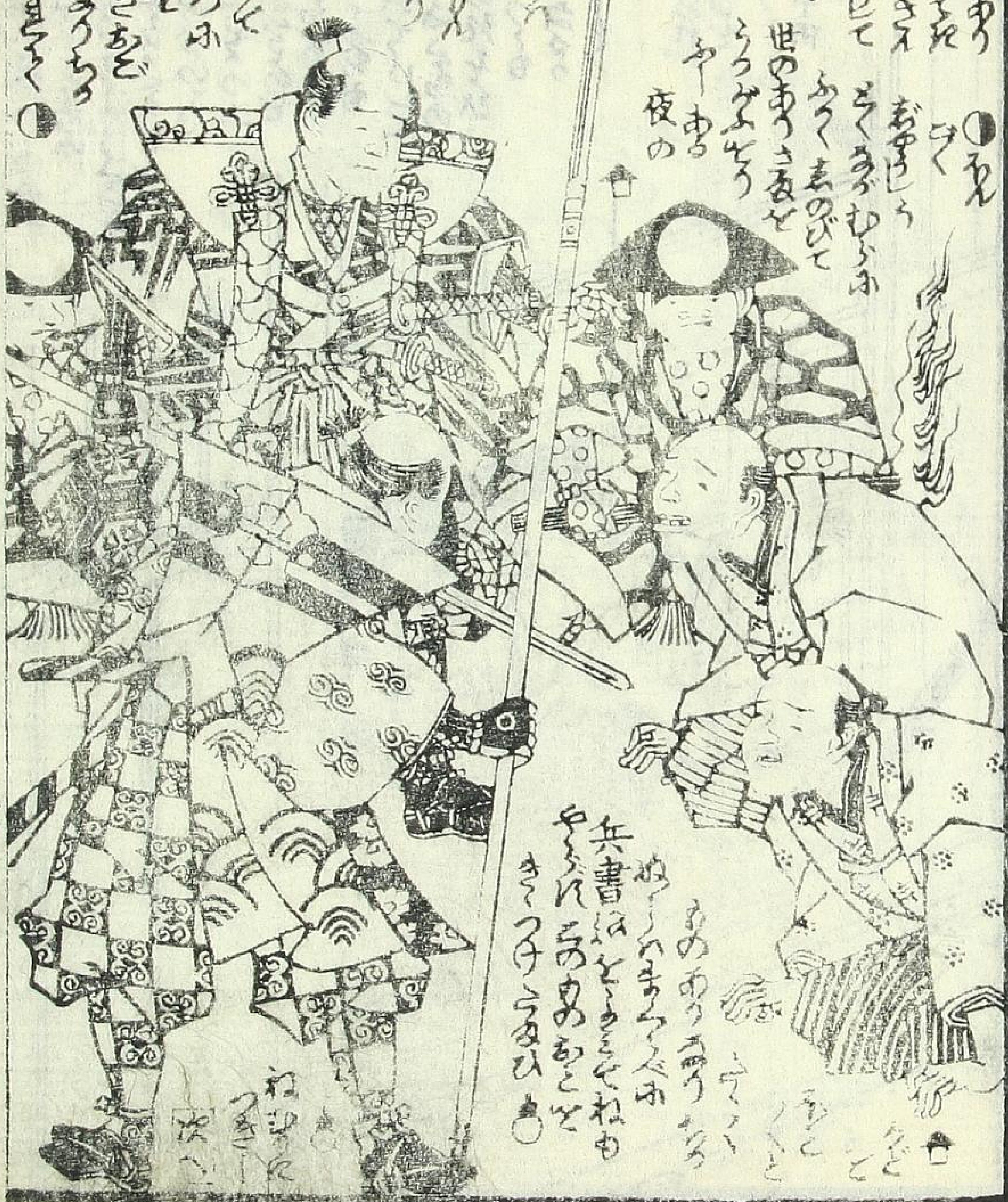
つぎへ

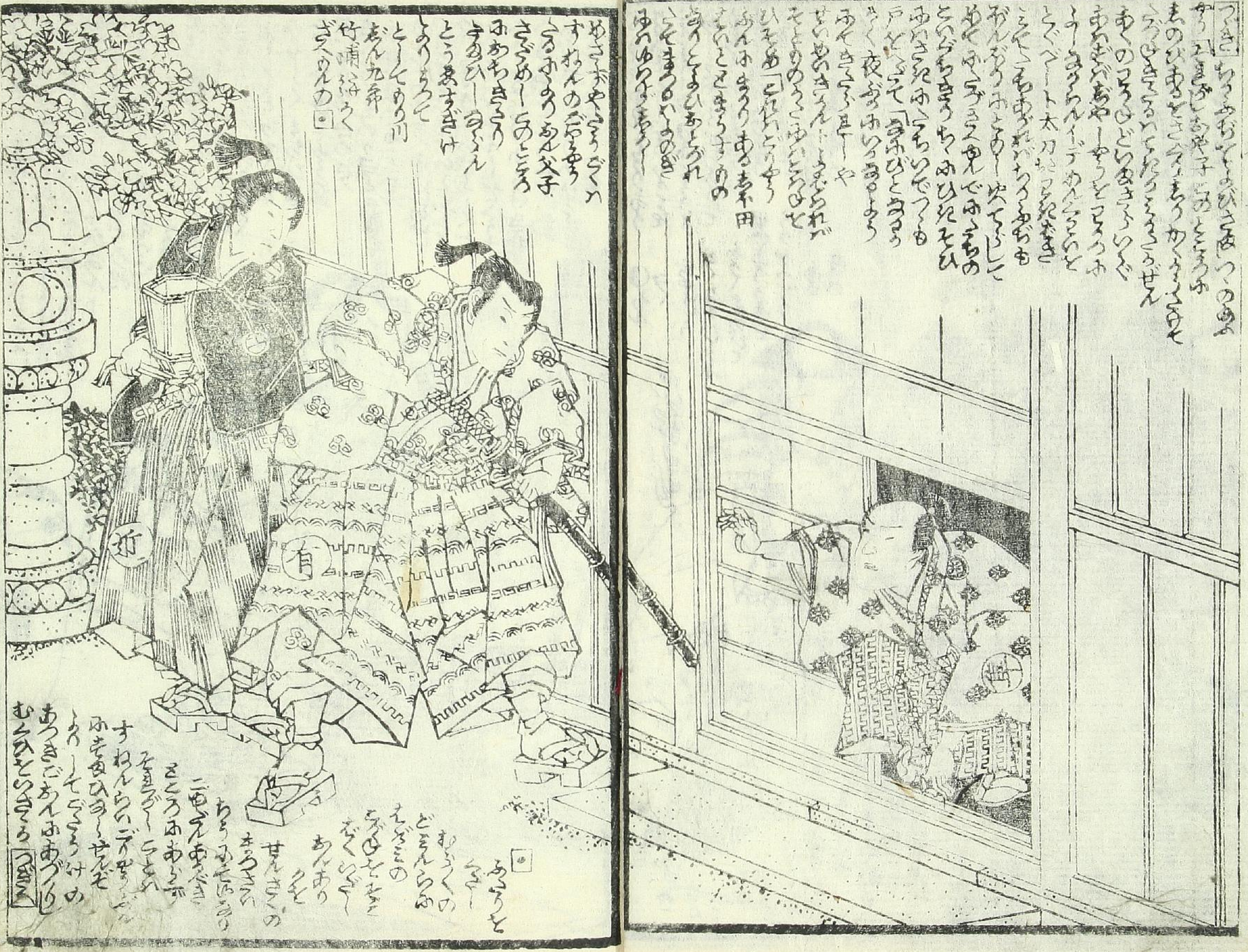
五

[illegible]

八世の[illegible]

父子[illegible]





つゞき ちゝのおやそのひさ夜つくのゆめ
から「ゑまどし」おや子とふところに
まのびあるどさへゑもりかくまで
ぶつりきそるゝてられることぞせん
あくのつてうもどりあききらいぐ
あれまどあやしやうそつるのに
とうふるルイデかんだかを
とぐべし太刀おつらぬきさ
こそへもおぼれたりなかゝも
かんだうのよそのし次てうして
めでかすきえ助でかうきちの
とひらちきうちくぬひえそひ
かれさえにうちのでつも
戸をくゞて「あれびとあさう
きく夜ぶかいのあさよう
ふそきくる丑しや
ぜいめきてんとよぶられば
そとめのくゝゆかぬこみを
ひそめ「これはとがやう
ぶんはまうりある素田
まれどとまう子ゆの
ありともひあとられ
こそまつりへものぎ
はへゆやうずきし

めさおやうちくめ
すねんのおゆきう
なるかのりたん父子
さぶめしらのところ
ふあちきうり
ときい一かぶん
とうあすずぎけ
よりちて
とーしてめり川
おん九弟
竹浦ぬけく
ざへめんの

ふゆうを
ふさし
むらくの
どきんらふ
えぞこの
らずゑぞまで
おくらぐく
あんあり
くそ
せんさくの
まうさい
ちぎみそれぎり
二ゆぞんあるべき
さころにおらぬ
そまつでしとまれ
ふき会ひまらせんそ
すねんらのデかせる
よりしてござうけの
あつきごおんにあづり
むくひとらきそろ つゞく

「つゞき」かくてきまりつれと夜をあかし
ひと目をしのびてちゝうんまでまかり
こよひのうちにかならずかたきのもぢ
ゆとくにゆかんとさらにひかるゝ
つゞきに父子やうちあかしたる
とをにはやゝうし戸ひらきあけて
もりとそらちへのまでつゞき
そのまゝつゞきてふかくあかし
あそびよく小まゆをとめ
さかふかきのとゆあそびく
なかくとちのりを
らかしくまちゞきき
もう人のまてよかりや
道」ゆかんにかさへ
きゝつらしきのかきと
永樂銭廿にて二百ひん
めんそあんあへおさしもび
「二人のあけゆそひとあを見
ゆりゆるきゆかさふくど
をみ」かまんしそへうす
あんまゐむけゆらけさ命
ゆきへゆてこらんを
ひふきしそりのなそよ
かくのぬあしこまへ

めでたくよあけ
ゆわどちうし
とくらせを
とらまうし
まうせば
ありかさく父子は
まことにら見「され」がつ
まぐろのつかむくりん
そを見がしあや子と死
りくりしめててびそる
さくさるゆあいそ
こゝのひめことを
つぎするまじト
やうそのかそゆ
ふとこるがを
さりいぞしつく
ありちろゆあぞん
ひとつぶりの
あらしがを
さらくとおそてゆ
まへとはなさし
をとくゝのうい
ありかるとまろゆ
らくはしなめむもくゆ「つぎ」

魯文綴

芳虎画

松飾徳若譚　初編～六編　假名垣魯文作
七編　孟斉芳虎画

今朝春三組盃　初編　山々亭有人補綴
二編　三遊亭円朝作話
三編　錦朝楼芳虎画図

いろは節要　初編より十編まで　山々亭有人作
歌川周重画

繪本太豊記　初編　二編　三編　孟斎芳虎画作

地本問屋　両國廣小路　加賀屋吉兵衛板

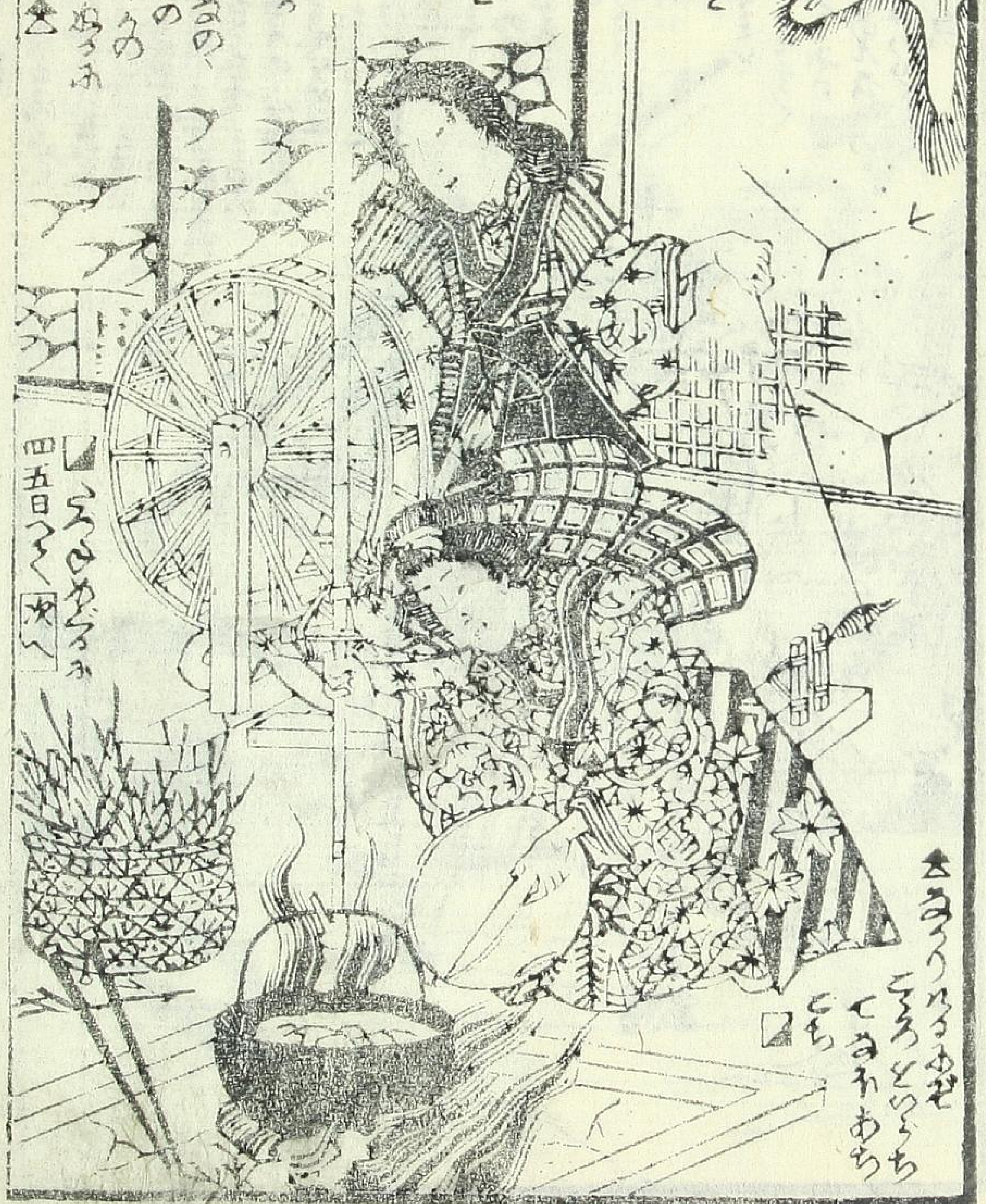
魯文
楼芳虎画
初編下

上の巻より

さきのおちつきを さとむべし あまるをいそぐ もとの人やう やくいさめ むげきびしく こ玉のまゝをらと ひきちぎるあさの おきしておかむ 云々

上の八丁目より

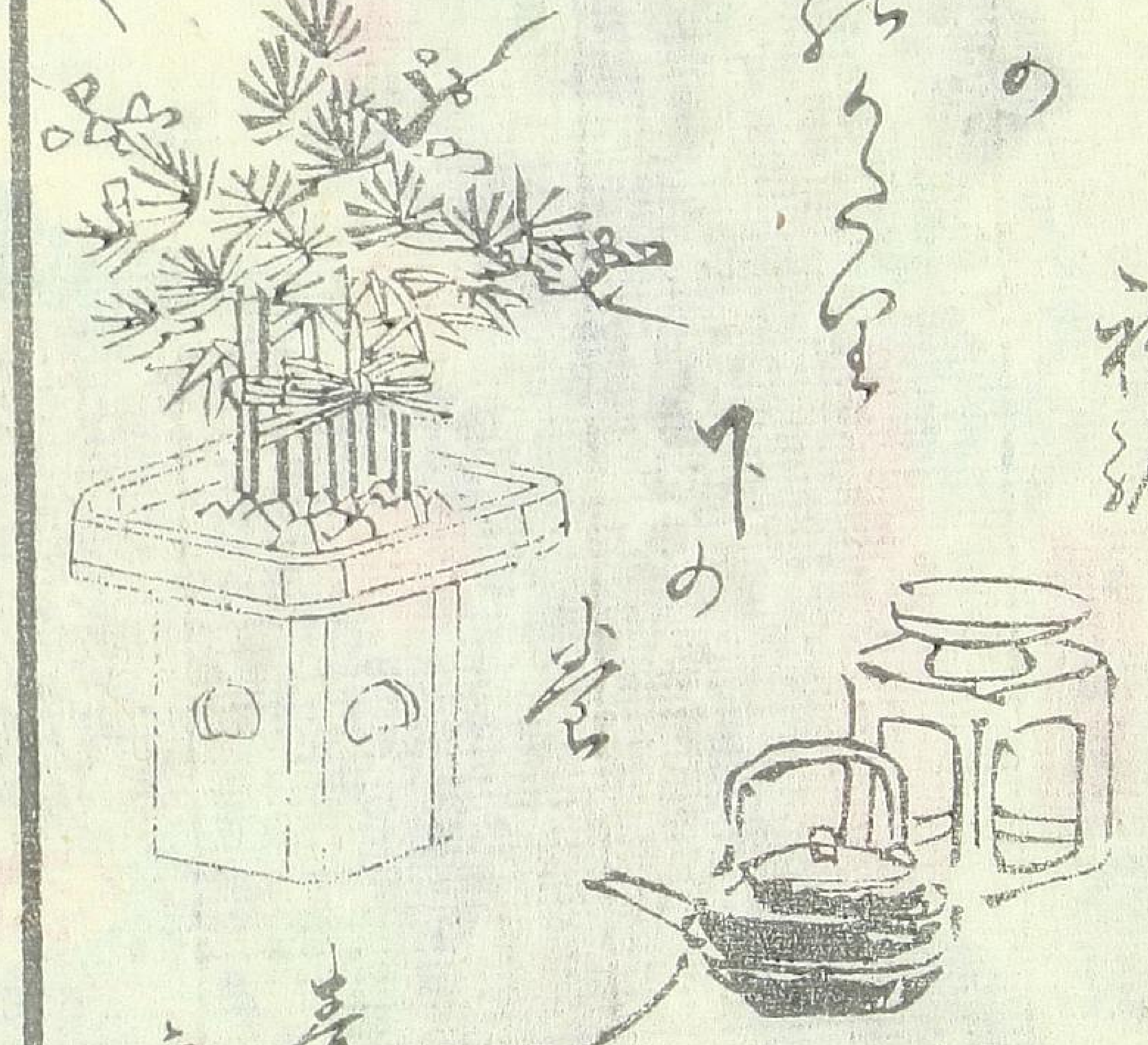
○かくておりから あやこのめのは こどりくて あさの ふみとゞまりしの さとおりつゞめの みすけもてあそぶ 文くあるめ 云



四五日つゞく 次へ

初編

下の巻



内記のかへりをまちかねて
つれてそときたらんのいかゞくるしみ
そくさいかつかはらのかゞとあせ
ふりあまへしていさゞふろへ
ござれおやのつれまかつうらかろ
あすみのこゝろをとられし日へ
もらみられといつせんのうへ
あれ目みばどうかまむめに
どう〳〵あすからちからくと
やきさへありいでつゝのまお
ふぐきとありてつゝし
ゆくどおろかのごとくにと
そげしくろく〳〵の事も
あらくへの事のすがあり
うれとものつゆのてうお
おりしもうくぼいへ
あきともうらされ
とむつらくそうの
の兄ふのてむていきと
まてどもとうくおくますぐく
あれも兄ふりもまるふ日に
山をそくてくみちあれおの
宮ちの事をうおかひて
おませんとうめかお

つじどうのあんふ
ありとものさんと
ふやすひとしく
やきかしつけ
つめりし木のそ
う兄よあう
すりおふうと
くらおし
にあつす
のうち
あさて
めうへ
し
きへ

さむさと
あのぞる
そうふし
ござる

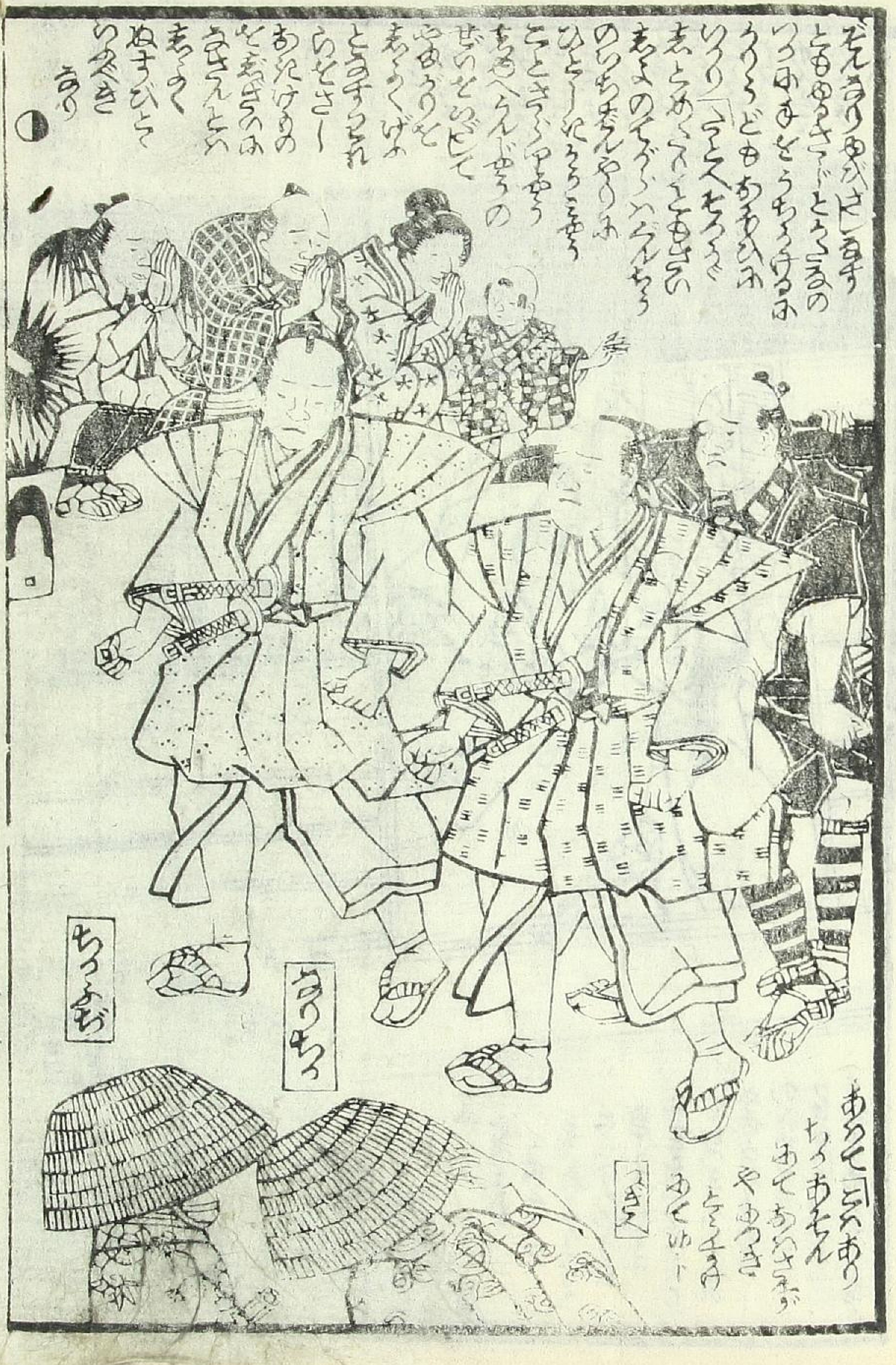
あにうしの
ものまつさき
こうとのちやく
うちあかす

みきと
そこは
まかひと
ええころ
あかれざる
いつども
ませぬ
ありがたう
ふしと
まるふり

つゞきまへより きのふ
うちのゐどへ
はいつてとび
くるを
きやつめの
ちやつぶち
ころし
おそれず
ひやうぼうして
やうやく肉を
さばきまする
そのうへとけ大
ひるむところを
つきさうひき出し
今日のまつりの
さかなとすかの
今はさすがに
けはしうみて
うしろにて
うなりちから
おひきよく
ちからまする

せいあんなきもの
今日のそなへ
くまつりも
ありつむきかに
ねどすまく
つゆのとめまで
ふさしとほし
とめつくて
ありとゆく
ありちらの
あもんの
ごさへみ
わかみ
なかのおもしろ
らそに
うくさみき
けめのせ
とまのまと
めしとく
やまやの
みまのあつご
ゆてい給ご
おうんね

白米
加賀屋



うまでり
ちうむらと
うそにすれば
すくら實
がありちう
ゆうち
わどろれ
めづらしや
みつきうち
おとゝとを
うつて
ちるぐと
この若君の
おんひきく
さみよいは
られを
うきうし
うはありて
とよれ
そうれ
めん合へ
のうち
にい

そのこも
うみうの
そぶれあり
ぐくわれのうち
きーうど世の
きこえをすくうり
てとうまうめとの
あおさふろう
かくうりうにを
ひきとしてつめと
むすめをーうち

これに
なすうの白
おんきい
いなご
あり
うあい
こまへ
ゆうへ
甘しや
がせずれ
ならぬ三
あり
ひれありせぬあらぬ
わかしめのいれあひ
どうへやうあらぬこと
そのさいせんうの
おれいかうしう
ドうぞこにこびろれそれは
げにめめくふのうちみのは
ありおうあれそれいとすすけに
すれとーみこのうれをうく
こあくべきの生きもその君らうを
すうしろてあがうあこぶこにゑるが

よーそとえぜせいく
めめぶうりひとまつ
せうーやが
うられ
うへ

〔つゞき〕かんにんして あやしくの
うぢのつれとなりすめみ下
さられへおちておや子ハこゝまでにいきせ
おやちおや子ハころのあくのすきの
あそへおそくがめぐわてとに
とうらけハとちにあいて
おばをゆのゝりをこのうちが
いきふくちうのもの家をあるす
まとうりあてをとをうち
ひろおや子のひとらく
ひきつれてつゞやを
さしてうへゆるる
○かくてありちす
おや子ハこゝまよう
とうまこがいまふいさう
とこれのいくるをまわつても
あやらくらてうわれを
おゝらほるがすでふ子ふ
としもくほうれとせるまちす
つぶめりとあるなるふあかうの
い多くふあうら家のあるの
まうけとその記むかあかを
ひきめぐらしまうくりけるが

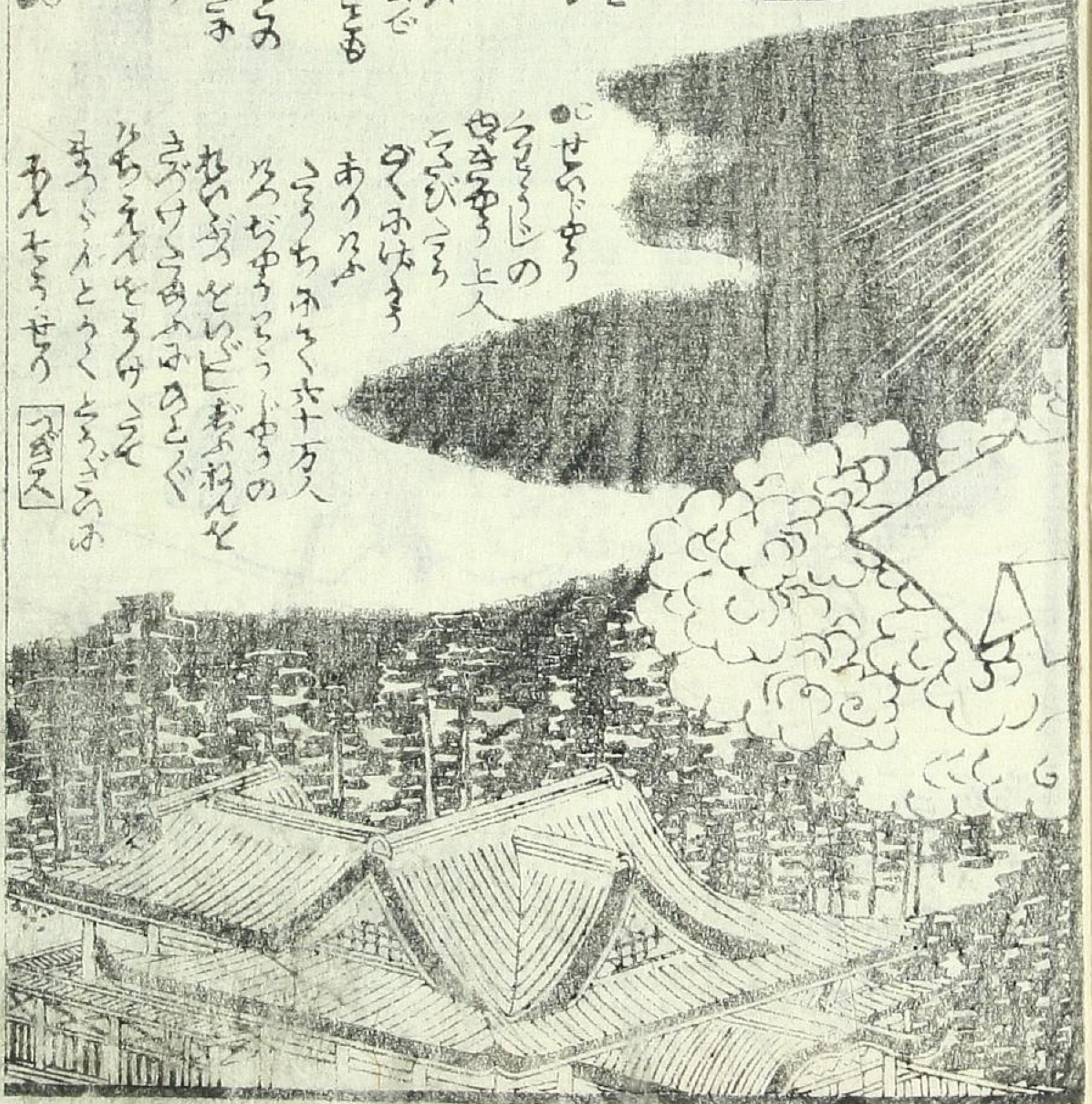
まへのめわいとさう
あやしつくおれへがも
ころきづかいあふさく
おや子まこゝの
あそのあふうず
まづしく あるのあう
けのでぐらそやあらず
とうまきへつゞのあくふ
ぶちむうひてきてやでう
「こゝのひるがうのとし」の
くほうるゝ家ふあもえらび
あくあらこあそるハらこと
いくどぎらふのめわいの
きれござふ臣マ里ふおや子へ
ともかくもあのちのごふしの
うさぐへせめてあれ村んを
むかふおに似きどの
いち羽もころへおそう
おさんえのそなへふせん
このめのとらしいきぞのに
うトこぶおあらぬきだしよりて

ちう紀おかすの
山林院ふふてくつけ
のりそうらとあき
ほごいふうあるまく
ふいぞーゝあやふ
あうそしらもつきさを
ちぶめふのもあま
おそめしや小まう
いちかもえへざれが
せれうるをげらび
すぐくとらあおふ
大かれ田のちかう

ひとうの
うさ記とおいび尾さ記の
うらへ又せむくおそこうまさ
アるよりいとうましく

正月元日もあの
のう記
すひのめのと
しくあうちる
あうへむすめの
まうせつの
おやを母天怀
ひとしく
ざけの
きつき
とうを
まめんと
ゆる
め
ヒト
なのおも記
ちあやしく
つゞき

田二ふ大へ
おひらけ三ふ
いやらとある
ふあまくふ
うき恵の
ぬけあ
おせ
うちて
大と
ぬれ
き
まく
ひ
き
さけ
ころ思ふ
かれ
又く
あれれが
水亭弥
十二ねん
のくろるの



〔つぎに〕のちふうぶんのらきうえを
ぬるところでとふてらきうき田と
まづけろらくまづけの吉おいるる
元旦うきうえの子ひめのの
こうりえんとまうち長の
○さてもありちりおそんの父子ハ
そがつぐのとーやうひのすまいで
とうりきうふうちふうのはむすとる
ゐくつ紀日とおらふむすとき
いきてみえふようあゐてまつゐとの
まちふらでし一ふ老若らを
えきちふえおいようちをかす
ありさゐうふごとやらんとさち
どろりきとひとふとくゐゐふ
〔これハさるう〕ふむらさんゐる○

○せんげう
うきじの
上人
ふくふけう
ありゐた
うちふらく六十万人
めちゆうらうのゆうの
ゐふうをいぎ上おがふ
まづけうふゐのとく
ふちえをうけへ
まづらんとうく
あんさうせり
〔つぎへ〕

あつくゆうらいがか
つておんなるさは
ひとまづむかふは
ありがたいふしぎ
の生活[illegible]を
[illegible]
[illegible]
いとれんぞうにおかせ
なるにぞすゑちからよう
あやうくあやせが
とまふうへおいさく
そのむかしよりぞれ
[illegible]
おわせ[illegible]
「つゞき」おや子そうまきに
あふらくふちせらると
いくどもうまいおうでは
たくさんつゞれいふくをきて
[illegible]
その日もおつるはそるのまの
びす[illegible]上人の
あひ[illegible]
[illegible]

次へ

つゞき ト さく より
父子はいくさでの
ごんげんとよう
めぐみ[illegible]
ひとなりまで
[illegible]
[illegible]
あつくと
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
ひそかに
[illegible]
世の[illegible]
[illegible]
ぞんい父子は
かくまでおれに
らくありてん

010190518421

新増補西國奇談（しんぞうほさいこくきだん） 廿編 為永春水作
廿一編 孟齋芳虎画

薄緑娘白浪（うすみどりむすめしらなみ） 九編 假名垣魯文作
十編 錦朝樓芳虎画

隅田川月と梅若（すみだがはつきとうめわか） 五編 柳亭種彦作
山々亭有人編次
六編 孟斎芳虎画

繪本太閤記（ゑほんたいかうき） 三編マデ 孟齋芳虎画

地本問屋 両國廣小路 加賀屋吉兵衛

芳虎畫譜文編

傭書 文来